

少女架刑

検印省略

定価 六八〇円

昭和四十六年六月十五日第一版発行
昭和四十六年九月三十日第二版発行

著者 吉村 昭

発行者 竹内静江

発行所 三笠書房

東京都新宿区戸山町三五
電話東京(二〇三)七七八一
〒102 振替東京 二二〇九六
信濃印刷・端野製本

© Akira Yoshimura Printed in Japan 1971.

0093-001034-8936

落丁・乱丁は本社またはお求めの書店でお取り替えます

少女架刑

吉村
昭

三笠書房

目次

少女架刑

7

白い道

73

星と葬礼

105

貝殻

159

墓地の賑い

203

あとがき

259

装幀 内田克巳

少女架刑

少女架刑

一

呼吸がとまった瞬間から、急にあたりに立ちこめていた濃密な霧が一時に晴れ渡ったような清々しい空気に私は包まれていた。

澄みきった清冽で全身を洗われたような、爽やかな気分であった。

私は、自分の感覚が、不思議なほど鋭く研ぎ澄まされているのに気づいていた。

家の軒から裏の家の軒にかけて、雨滴をはらんだ蜘蛛の巣が、窓ガラス越しに明るくハンモックのように垂れているのがまばゆく目に映じている。

蜘蛛の巣は、裏の家の小暗い庇の下に固着している。その庇の下に、雨を避けた小さな蜘蛛がひそかに身を憩っているのを、私の視覚ははっきりととらえることができた。新芽のように小気味良くふくらんだ華麗なその蜘蛛の腹部に、繊細な毛が無数に生え、その毛の尖端に細や

かな水滴が霧を吹きつけられたように白く光っているのさえ見てとることができた。

私の聴覚も、冴え冴えと澄んでいた。

軒端から落ちる雨滴の音——それが落下する箇所それぞれ異った音色を立てていることも鮮明に聴き分けることができた。

弾けるような乾いた単調な音は、勝手口の石の台の上に落ちる雨雫の音。明るいなんとなく賑やかな音は、窓ガラスの下の方の砂礫の浮き出た土の上に落ちる水滴の音。水滴が土を掘り起しその小さな水溜りの中で細やかな砂礫が、雫の落ちる都度互に身をすり合わせ洗い合っている気配すら、私の耳には、はっきりとききとれた。

突然、私の感覚が、かき乱された。

家の前の露地から、軽快なしかし鋭く突きささるようなクラクションの音が、澄明な樂の音にも似た雨滴の音を消してしまった。

迎えの自動車が来たのだ。

私は、耳をすました。

自動車のドアの鈍い開閉音がきこえ、そして水溜りをとびながら私の家に近づいてくる靴の音がした。私は、入口のガラス戸を凝視した。と、曇りガラスに白いものが薄く映った。そして、ガラス戸のふちに肉色の指頭が色濃く密着すると、ガラス戸が軋みながら引き開けられた。

「水瀬さんは、こちらですね。病院から参りました」

短い薄汚れた白衣を着た瘦身の男が、顔をのぞかせた。

父も母も、一瞬放心した眼を入口の方へ向けたが、急に気づくと立ち上り、あわただしく部屋の中を取り片付けはじめた。六畳一間きりの空間を私の仰臥した体が占めているので、母が内職に彩色している白けたお面の山は、乱雑に部屋隅にうず高く積み上げられた。

母が区役所に行つて手続きをして帰つて来たのは、わずか十分ほど前。すでに迎えがこようとは、母も父も予測すらできなかったのだろう。

「むさくるしい所でございますけど……」

母は、淀みのない慇懃な口調で、着物の衿を病的なほど指先でいじりながら男をうながした。

男は、遠慮する風もなく、すぐに靴を土間に脱いで茶色く変色している畳の上に上つて来た。頬の赤い骨ばつた顔の男だった。

「いっお亡くなりです」

男は、私のふとんの近くに坐ると、それが習性らしくすぐに言った。

「九時一寸過ぎでございました」

母は、大きな眼を媚びるように見張った。

男は、髪も乱れ衣服も垢じみている母が、思いがけず丁重な口をきくことに少し戸惑ってい

るようだった。

「まだ、お若いようですね」

男は、面映ゆ気な表情で手拭をかぶせられた私の方を見つめた。

「はい、十六歳でございました」

「それはお気の毒でしたね」

男は、わざとらしく眉を曇らせた。

男の着ている白衣は、何度も洗い晒されたものらしく織り目も浮いて見え、ボタンも半分かけて糸が今にもとれそうに垂れ下っている。

「では、早速で恐れ入りますが、埋火葬許可証を見せていただきたいのですが……」

母は、一瞬その意味が判らぬらしく、「はい？」と、眼を見張ってみせた。

「区役所でたしかくれたと思いますが、書類を……」

母は、漸く納得がいったらしくしきりにうなずきながら、身を少しよじるようにして着物の衿元から幾つにも畳んだ書面を取り出し男の前につつましくさし出した。

父は、眼を赤く濁らせながら、部屋の隅に身をすくませて坐っている。

「それから、これに捺印していただきたいのですが……。もしなければ拇印でも結構です」

男は露骨に急いでいる風を見せて、解剖承諾書と書かれた紙を畳の上にひろげた。

「はい、はい」

母は、愛想よく返事をする、すぐに立って押入れの下段にはめ込まれた茶簞笥の前に膝をつくと、曳出しから紐のついた古びた小さな印鑑をとり出して来た。朱肉がないので、母は、何度もその印鑑に息をはきかけた。

「御参考までに申し上げて置きますが、病院では丁重にお嬢さんのお体を調べさせていただきますから、火葬し、きちんと骨壺に納めてお宅の方へお返しいたします。勿論その間の費用は、すべて病院持ちです」

男の声は、何度もいい慣れているらしい殊更莊重さをこめた淀みのないものだった。

母は、神妙な表情で伏目になって何度も相槌を打っていた。

「それから……」

男は、白衣のえりから手をさし入れ、内ポケットから、白い紙に包んだものをとり出した。

墨で、香奠料と記されている。

「これは、病院からのものです」

男は、あらたまった表情で母の方へ押しやった。

「さようで御座いますか、御丁寧に。……では、遠慮なく頂戴させていただきます」

母は、一寸面映ゆ気な表情を顔に浮べながら、指を揃えて深々と頭を下げた。

身をすくませていた父も、母にならって頭を下げた。

「それでですね」

男の声が、一層事務的になった。母は如才ない表情で少し頭をかしげながら男の顔をうかがった。

「病院の規則で、最低一カ月はお嬢さんのお体をお預りすることになっているのですが……、お骨は、いつ頃お返しいたすことにしましょうか」

男は、母の顔を探るような眼つきで見つめた。

「さようでございますね」

母は、少し身をひくようにしてなんとなく照れたような愛想笑いをしながらも、返答のしようがないらしくわずかに困惑の色を顔に浮べた。

「どうでしょう、二カ月ぐらいでは……」

男は、母の思案を封ずるような口調で言った。

母は、どう返事をしてよいのかわからぬらしく、顔をこわばらせて父のいる部屋の隅の方を振り向いた。

父は、母と視線が合ったが、ただ眼を臆病そうにまたたいているだけであった。

母が父に、微かながらもすがりつくようなそんな視線を向けたのを見たことは、私にとって

初めてのことだった。父も、母の視線に戸惑いを感じているようだった。

「よろしいですか、それで」

男のせかせかした声に、慌てて男に顔を向けると反射的に、はい、と母はうなずいた。

そうですか、それでは二カ月後——男は、書面に万年筆で書き込むと、

「では、運ばせていただきます」

と、立ち上り、ガラス戸を開けて外へ出て行った。

男が出て行くと、母は急にいつもの疲れたような険しい表情にもどり、香奠料と書かれた包みを手にとると、私の枕もとに置かれた蜜柑箱の上に置いた。中身の金額を推しはかる不安そうな表情が、母の疲れた顔にひろがった。

父も、紙包みの方をじっと見つめている。

「いいかい」

ガラス戸の所で妙に明るい男の声がして、後向きになった白衣の男が節だらけの寝棺を持って入って来た。もう一方の隅は、髪濃い若々しい白衣の男が持っている。

部屋が狭いので、棺は処置に困るほどひどく大きく見えた。棺は、私の寢床と平行に部屋一杯に下された。

棺の木蓋がとられ、私の薄い掛ぶとんが除かれた。